

『狭衣物語』論

——狭衣大将の即位の意味——

大倉比呂志

狭衣大将(以下、狭衣と称する)は巻四において即位するわけだが、それに関して『無名草子』では、

① 何事よりも何事よりも、大将の、帝になられたること、返す返す見苦しくあさましきことなり。めでたき、才、才覚すぐれたる人、世にあれど、大地六反震動することやはあるべき。いと恐ろしく、まことしからぬことどもなり。源氏の、院になりたるだに、さらでもありぬべきことぞかし。されども、それは正しき皇子にておはする上に、冷泉院の位の御時、我が御身のありさまを聞きあらはして、ところ置きたてまつりたまふにてあれば、さまでの咎にはあるべきにもあらず。太上天皇にならずらふ御位は、ただ人も賜はる例もあるを、これは、今少し奇しくまねびなされたるほどに、いと見苦しきなり。さりとして、帝の御子にてもなし。孫王にて、父大臣の世より姓賜はりたる人の、いとあさましきことなり。何の至りなき女のしわざと言ひながら、むげに心劣りこそしはべれ。大臣さへ院になりて、堀川院と申すかとよ

な。物語といふもの、いづれもまことしからずと言ふなるに、これは殊の外なることどもにこそあんめれ。^①

と語られており、特に①において狭衣即位のことが酷評されている。②は冷泉帝が実の父親が光源氏であることを知り、父親を差し置いて即位していたために、光源氏への讓位を提言するが、光源氏によってそれが固辞されたために、苦肉の策として藤裏葉巻において、光源氏に准太上天皇の称号が付与されたのであった。それに対して批判的に語られているわけだが、光源氏は桐壺帝の第二皇子であると同時に、桐壺巻において、高麗人の相人が光源氏のことを本来ならば帝になるべき人物であるが、そうすると国が乱れる可能性があり、帝を輔佐して政治を行なう臣下の立場とも相違していると判断したと相俟って、狭衣即位に対する批判ほど激しいものではない。③は狭衣即位に伴い、父親の堀川大臣が太上天皇となり、母親も皇太后宮となるわけだが、狭衣の即位が語られているということは、光源氏が即位できなかったことへの願望であると同時に、皇子ではない狭衣が即位できたのだから、桐壺帝の第二皇子である光源氏が即位できなかったことへの抗議ではなからうか。このように狭衣即位をめぐる、それがどのような意味を持っているのかに関していささか論じていこうと思う。

父堀川大臣は、

② 一条院、当帝(後の嵯峨院。以下、この呼称による)などの一つ后腹の五皇子ぞかし。母后もうち続き、帝の御筋にて、いづ方につけても、おしなべての大臣と聞こえさするもかたじけなけれど、何の罪にか、ただ人になりたまひにければ、故院の御遺言のままに、帝、ただこの(堀川大臣ノ)御心に世を任せきこえさせたまひて、公私の御ありさまでたし。(①巻1・二二)⁽²⁾

と語られているように、皇子であり、兄弟は即位しているのに、なぜ堀川大臣だけが帝位から逸脱したのかという点が疑問となろう。④「五の皇子」であるならば、長幼の順序に従えば、即位できなかったとしても問題にはならないが、流布本のように「二の皇子」⁽³⁾だとすれば、弟の嵯峨院が即位して、なぜ兄である堀川大臣が即位できなかったのかという問題が浮上してくることになる。だからこそ、狭衣に嵯峨院の娘女二宮との結婚話が持ち上がった時、女二宮の母大宮が結婚に反対であるのを狭衣から聞いて、堀川大臣が「……かく口惜しくなりそめにけるみづからの宿世……」(①巻2・一六四)と嘆いている点から、堀川大臣の帝位に対する執着を看取することができる。堀川大臣が②の④で語られているように、どのような「罪」によって臣下にならざるをえなかったのかに関して、故先帝の妹で前斎宮であった狭衣の母親との密通に基因するという説があり、あるいは、父の

③ 「故院の異事はいみじう思しながら、この方をばいとあやにくに制

しいさめて、九重の内よりをさをさ歩かせたまはざりしかど、かしこうこそぬすまはれつつ、至らぬ隈なかりしか。」(①巻1・六五)

という発言にもあるように、故院の眼を盗んで漁色に余念が無かったのであり、いわば父の好色性が指弾された可能性もあるが、堀川大臣が即位できなかった真相は不明であるとしか言いようがない。

では、堀川大臣と兄弟の帝たちとの関係はどうなのか。弟の嵯峨院が出家を決意した際に、

④ 大臣などはなほ口惜しう惜しみきこえさせたまひけり。(嵯峨院ト堀川大臣トハ)さてさるべき御仲と言ひながら、いとありがたき御心ばへなれば、……(①巻2・二六一)

とあり、また、後一条帝(注一故一条院の子)に入内した嵯峨院の女一宮を、「嵯峨院も、ただ大殿に任せきこえたまへれば、まことの御女のやうに、扱ひきこえたまへり」(②巻3・一六二)とあり、「大殿の、もてなしかしづききこえたまへるさまを、嵯峨院にも、いかでかはおろかに聞こえさせたまはん」(②巻4・二二四)とあって、堀川大臣には源氏宮が斎院となつたために、入内させる娘がいはいえ、女一宮を大切に扱っているの⁽⁵⁾であつて、いわば、嵯峨院と堀川大臣との良好な関係が語られている。

さらに、嵯峨院は女二宮から始まって三人の皇女のいずれかを狭衣と結婚させたがっており、女二宮との結婚が不成立になると、次に女三宮を狭衣に降嫁しようと考えたことに対して、「懲りずまに思しめしけり」(①巻2・二五八)と女二宮と狭衣との真相を知らない嵯峨院が嘲笑的に語られているほどである。嵯峨院の狭衣に対する扱いは、

⑤ 「(狭衣ガ)いはけなかりつるほどより、(狭衣ノ父ノ)大臣のけしきにも劣らずこそ思ひつれ、かくばかりのことをだに聞かざりければ、

まいてを、よろづ推し暈られぬ。よしよし言はじ」とて(嵯峨院ガ) ませだたせたまへば、……(①巻1・四〇)

⑥ 嵯峨院の、昔より、殿(注一堀川大臣)の御心ざしにも劣らず、あはれにかたじけなかりしをだに、……(②巻3・八九。狭衣の心中思惟)

⑦ 「昔より、嵯峨院の御心ざし、ありがたくおぼえさせたまひしかど、……」など、(狭衣ガ堀川大臣ニ)聞こえさせたまへば、……(②巻3・一六〇)

⑧ 「嵯峨院の、(狭衣ヲ)あながちに思したりし余りに、……」とてぞ、(狭衣ハ)涙ぐませたまひぬる。(②巻4・三八一―三八七)

⑨ 帝(注一狭衣)も、もとより、あるべきほどの御心ざしばかりにはあらぬ(嵯峨院ト)御中なれば、……(②巻4・四〇四)

と語られているように、嵯峨院と狭衣とは通常の叔父と甥との関係以上の間柄であったと考えられる。

また、兄の一条院と堀川大臣との関係も、

⑩ 一条院の御心ざしのおろかならず思し知らるれば、一品の宮をなほ、おろかに思ひきこえさせたまふまじく、堀川院には、(狭衣ニ)聞こえさせたまひつつ、……(②巻4・三五二)

とあるように、二人の関係も良好であったと考えられ、堀川大臣は二人の帝に対して、自分が即位できなかったという遺恨はなかったようであり、さらに、堀川大臣の父親である故院に対する遺恨も語られてはいない。

ただ、嵯峨院の女二宮降嫁の件と一条院の一品宮の結婚話に際しての堀川大臣の狭衣に対する対応に差異が見られるようである。すなわち、堀川大臣は女二宮との結婚を狭衣に説得してはいるものの、狭衣にとって不快になるような叱責をしていないのに対して、一品宮との件に関しては「ま

れまれむつかりたまひて」(②巻3・八七)、「むつかりつつのたまへば」

(②巻3・一一三)などとあるように、かなり強い口調で狭衣を叱責しているのである。もちろん、そこには堀川大臣にとって弟の嵯峨院の娘と兄一条院のそれとの間での態度に差異があったとしても、一条院に対して堀川大臣が遠慮しているように感じられると同時に、狭衣と一品宮との結婚話に父子二代にわたって皇女との結婚が実現されるという点で、「年ごろの御本意叶ひにたりと思し喜びたり」(②巻3・八九)と堀川大臣は満足感を表明しているのである。格別一品宮でなくてもよさそうであるが、女二宮は出家し、女三宮は齋宮に決定し、女一宮に対しては狭衣が興味を示していないという点からも、一品宮が最後に残された皇女であるという意味もあろう。そこに堀川大臣の即位できなかったという負い目を無化しようとする気持ちがあったのではないのか。とすれば、それは堀川大臣の皇族に対する執着の表象でもあったのだ。

三

帝の前で狭衣は横笛の演奏を強制された結果、その音色に魅了された天稚御子が降下して、狭衣を昇天させようとはするものの、「かく十善の君(注一帝)の泣く泣く惜しみ悲しみたまへば、えひたすらに今宵率て昇らずなりぬる」(①巻1・四四)ことになったと語られている。そのような意味において、『狭衣物語』は『竹取物語』を基層に据え、「翼をものがれたかぐや姫の物語」⁽⁶⁾であると理解することは可能だろう。だからこそ、狭衣は「変化の現れたまへるにや」(①巻1・二四)と語られ、世間の人々からは「この世の人にはおはせず、天人の天降りたる」(①巻1・四五)と言わ

れ、父の堀川大臣は狭衣を「この世の人と思されざ」(Ⅰ巻1・四七)るの
であり、中納言典侍をして「変化のもの」(Ⅰ巻2・一八三)と思わせるの
である。さらに、下衆たちの会話として、

⑩ 「あはれ、めでたき人の御徳に、天稚御子をさへ見たてまつりつる
かな。されど、中将殿(注―狭衣)のにはひには、こよなく劣りたま
ひたり」(Ⅰ巻1・四八)

とあり、傍線部で語られているように、狭衣の美しさは天稚御子を凌駕す
るものであったのだ。また、女房たちの会話の中で、

⑪ 「大納言(注―狭衣)の笛もてなやみて、いかにせましと思ひなやみ
たまひし火影のかたちには、(天稚御子ハ)並ぶべくもこそ見えざりし
か」(Ⅰ巻2・一六九)

⑫ 「中務宮の姫君にぞ、(天稚御子降下ノ)その夜のことを語りきこえ
させしを、やがてそのままに(中務宮姫君ガ)絵にかきたまひたりし
御子の御容貌は、うるはしく、めでたうて、いとようこそ似たりしか。
(中務宮姫君ガ)『大将の御ありさまぞ、すべて及ぶべくもあらぬ』と
て、果ては破りたまひき」など語れば、……(Ⅰ巻2・一七〇)

とあることによっても、美しさという点で前述した例と同様、天稚御子よ
りも狭衣の方が勝っていると語られている。すなわち、狭衣∨天稚御子と
いう図式が成立する。とすれば、これらは狭衣の美しさの突出性が語られ
ているのであり、それも天人よりも美しいと語られていることは、狭衣が
後に即位する伏線として把握することができるのではなからうか。

ところで、狭衣が思慕している源氏宮にあてた東宮(注―後の後一条院)
の手紙を見て、

⑬ 何事も及ぶまじき際にはなかりける身ながら、いま一際(東宮ニ)

劣りきこえさせにける前の世の行ひのほどぞ、口惜しき。(Ⅰ巻2・二
四五)

と東宮と臣下との歴然たる落差をかみしめて、狭衣の東宮に対する悔しさ
が語られており、その源氏宮の東宮への入内が近付いた折、

⑭ 琴を手まさぐりにしたまひつつ、空をつくづくとながめたまへるに、
霧ふたがりて月もさやかならぬに、いとどものあはれにて、天降りた
まへりし御子の御ありさま思ひ出でられたまふ。(Ⅰ巻2・二七〇)

と傍線部のように語られているのは、源氏宮の東宮入内が実現すれば、狭
衣にとってこの世に生きる張り合いがなくなるために、異境である天空へ
の昇天を希求したのではなからうか。だが、源氏宮の入内は一条院の死去
のために、齋院に選ばれた結果、中止となった。源氏宮が齋院になるとい
うことは帝の分身となることを意味するのであって、それは将来における
狭衣の即位と関わっており、狭衣の未来を先取りしているのではなからう
か。その後、狭衣は故式部卿宮の娘である宰相妹君(以下、原則として妹君
と称する)と結婚するわけだが、その妹君は源氏宮の「形代」(Ⅱ巻4・二
八二、三三七)であると語られ、以下の例のように、巻四において源氏宮
との類似性が何度も語られているのである。

○(狭衣ガ妹君ヲ)見たてまつりたまふに、齋院にぞいみじう似たてまつ
りたまへりける。(二八一)

○灯をつくづくと眺めつつ(妹君ガ)添ひ臥したまへる、(狭衣ガ)ふと
見つけたるに、ただ、それ(注―源氏宮)かまで思ひ出でられさせ
たまふ御手洗川の面影さへ立ち添ひて、……(三〇一)

○(妹君ノ)取る手もすべるやうなる筋のうつくしきなど、齋院の御髪
にいとよう似たまへり。(三二二。大式の乳母の視線)

○(女二宮腹ノ) 若宮、「大将の御方には、齋院の御前に似たてまつりたる人ぞある。……」と恨めしげに思してのたまふを、……(三一九)

○(大式ノ乳母ガ堀川大臣夫妻ニ)「……。(妹君ガ) 齋院にぞ、あやしきまで似たてまつらせたまへる」など語りて、……(三二〇)

○(妹君ガ) 世に知らずうつくしげなるも、なほ、あさましきまで、思ふ人(注一源氏宮)にも、似たてまつりたまへるかなと、(狭衣ハ) 見たまふ。(三二八)

○またいかにぞや、ただ(妹君ガ源氏宮ニ) それか、とまでおぼえたてまつりたまへる御かたち・けはひにも、ふと(狭衣ガ) 思ひ出でられさせたまふ片つかたは、まづ胸ふたがりたまひて、……(三二九)

だが、妹君と源氏宮との類似性は、系図を見る限り、濃厚な血縁関係があるとは考えられず、その点からすれば、桐壺更衣と藤壺との類似性⁽⁷⁾と同工異曲であるわけだが、源氏宮が齋院として帝の分身になると同様に、源氏宮と類似する妹君が将来藤壺中宮となって、狭衣帝との間が「細やかにうち語らひたまへるあはひ、見るかひありて、めでたき例にしつべし」⁽²⁾ 卷4・三三〇とある点からしても、帝の対として、いわば狭衣帝の分身になることが暗示されているのではなからうか。だからこそ、狭衣と結婚した一品宮は死去する必要があったのだ。

また、後一条院は我が子のいないことを嘆き、

⑩ 「嵯峨院の若宮を、なぞて預りきこえざりけん。……なかなかの国王よりは、めでたき人(注一狭衣) のよすがになりたまへるも、げにいとめやすきことなれど、おのづからありさまも、(狭衣ヲ) ただ人に見るは、いと心苦しうあたらしき心地なるに、……」など、のたまはせけるを、……(2卷3・一五九)

とあるように、狭衣は普通の帝よりも秀れていると発言しているし、狭衣が即位してから後、「なほ国王と聞こえさするにも余りてけ高うなまめかしく見えさせたまへり」⁽²⁾ 卷4・三六五とあるごとく、狭衣は従来の帝以上に気品があり、優雅であると語られている点からすれば、臣下である狭衣が即位すべき伏線が既に⑩において語り始められているといえよう。⁽⁸⁾

さらに、狭衣は東宮(注一嵯峨院と坊門の上の娘との子)の許に参上し、妹君のことで狭衣が東宮をからかったところ、「御顔うち赤め」た東宮のことを狭衣は「あな、幼の御さまよとをかしう見たてまつりたま」(以上⁽²⁾ 卷4・二五七)い、狭衣は妹君に贈歌するわけだが、それを「この殿をば、いとうち解けがたう恥づかしきものにぞ(東宮ハ) 思ひきこえさせたまへる」⁽²⁾ 卷4・二五八とあるように、年少の東宮が狭衣に完全に圧倒されている状況が語られており、そこに狭衣の次期帝位予定者の東宮に対する優位性が浮き彫りにされているのではなからうか。これもまた後にこの東宮を飛び越して狭衣が即位するための伏線だったのだ。⁽⁹⁾ この東宮は妹君に入内を勧めているのだから、東宮は少年ではなく、成人の領域に達しているのにもかかわらず、⁽¹⁰⁾ なぜ即位できなかったのか、この点に關していささか述べていくことにする。妹君の結婚に關して、兄の宰相から妹君たちの父親である式部卿宮が生前、「今はまた東宮に故宮の啓しおきたまひけることもあり」⁽²⁾ 卷4・二四七、また、「式部卿の姫君を、故宮の、かならず御覽せせんとおぼいたまひてしを」⁽²⁾ 卷4・二五四と東宮に入内させることを願っていたと語られ、さらに、狭衣の異母姉の中宮(注一後に皇后宮)が「故宮の、ただこの君のことをのみ返す返す言ひ置きたまひしかど」⁽²⁾ 卷4・二六一と語っていたにもかかわらず、宰相は、

⑪ 「帝・東宮と聞こえさすと、この(狭衣ノ) 御ありさまにならずらひ

なるべきやうも見えたまはぬを。大将どの、ほのめかしたまひてほど
経ぬるに、見せたてまつりたまへ。その(狭衣ノ)御かたちばかりに
や、(妹君ニ)似つかはしからん」(②巻4・二五四―二五五)

と母親に語り、その母親も妹君に、

⑩ 「自分ガコノ世ニ侍らずなりぬとも、この人(注―狭衣)の御もて
なしに従ひたまへ、などぞ思ひはべれば、かう見はべる折に、ことご
としからぬさまにも聞こえならひたまへかすと、思ふなり」(②巻4・
二六七)

と語っている点に表象されるように、妹君の相手として、東宮ではなく、
狭衣を選択するのである。東宮妃となるにあたっての後見のなさ、狭衣の
すばらしさ、兄宰相の狭衣推挙という諸条件が重なり、母親は妹君を狭衣
に託すのである。とすれば、妹君の結婚相手として狭衣が勝利を収めたの
であって、桐壺帝の強い意向があったとはいえ、左大臣が娘葵上を光源氏
の兄東宮ではなく、光源氏と結婚させたことと同工異曲であろう。ちなみ
に、狭衣を妹君の相手として選択したことが正しかったことは、

⑪ 宰相も(狭衣ノ所ニ)思ふさまに出で入り、(妹君ヲ)見たてまつり

たまふに、故宮おはして、限りなき内裏参りに思し立ちたらしも、

えかうしもやと、思ふさまに思さるるにも、……(②巻4・三三二)

と語られている点からも、狭衣V東宮という図式が成立し、これも狭衣即
位の伏線として考えるべきだろう。そこに『源氏物語』における光源氏V
朱雀帝という図式が厳然と語られているのにもかかわらず、即位できな
った光源氏との差異化に注目すべきなのだ。

そのうえ、狭衣が即位する前に、

⑫ やむごとなき上達部なども、内裏わたりの宮仕へよりも、まづまづ

と、(堀川邸ニ)参りたまひつつ、日を暮し夜を明かしたまふにつけて
は、また今少し、この御方(注―狭衣)には参りようしたまふぞ、こ
とわりなるや。(②巻4・三三八)

と語られており、このことによっても狭衣の方が帝よりも優勢であり、狭
衣即位に対する伏線として機能しているといえよう。

このような周到な伏線が配置された後で、皇祖神である天照神が齋宮
(注―嵯峨院の女三宮)に狭衣の即位並びに若宮の将来における即位を託宣
したのである。⁽¹¹⁾このことによって、狭衣即位が絶対化されたのだ。

四

狭衣は、

⑬ 左大将の御女、宣耀殿と聞こえて、東宮にいみじうときめきたまふ
を、いかなりける風の便りにか、ほのかに見きこえたまひてけり。さ
れど、いかでかは、思ふさまにもあらん。御文などだに通ふこと難く
ぞありける。(①巻1・三四)

とあり、東宮(注―後の後一条院)の宣耀殿女御との隠れた交際が語られて
おり、その後に、「宣耀殿のをかしきさま、人にはことにおはするさへ、
東宮、つとまとわしきこえたまへれば、いとかたきことなる」(①巻1・七
二)、「宣耀殿に(東宮ガ)渡らせたまひぬれば、今宵はかひなかるべきな
めりと、すさまじうてまかだたまふ」(同・七四)とあって、宣耀殿女御と
の交際は続いているようであり、いわばこれは皇権への犯しであると考え
られよう。

さらに、狭衣は横笛演奏による奇瑞の恩賞として降嫁を示唆された嵯峨

院の女二宮のもとに闖入した結果、女二宮が妊娠したので、母親の皇太后宮が偽装出産するわけだが、それによる心痛が原因で母親は死去、女二宮は出家してしまう。また、一条院の一品宮の所で養育されていた飛鳥井姫君を見たさに狭衣が忍び込んだ結果、濡衣を着せられ、結婚せざるをえなくなつたわけだが、狭衣の真意が一品宮に知られてしまったために、一品宮は態度を硬化させ、狭衣は即位後に入内を要請するが、それに応じず、出家後に死去するのである。

以上のように、狭衣にとって女二宮の出家、一品宮の死去という、いわば皇女の喪失を経験するわけだが、特に女二宮の件に関しては、明らかに皇権への犯しであつて、狭衣が即位するためには、皇女もしくは女御などとの密通事件が必要であるとする見解がある⁽¹²⁾ように、狭衣を帝位に即けるためには、皇統譜を犯して、無意識裡に父大臣が臣下たらざるをえなかつたことに対する報復が要請されたのではないか⁽¹³⁾。そうすることによって、帰属が明確ではなかつた若宮は、『その御次々(注―狭衣帝の次)にて、行く末をこそ。親をただ人にて、帝に居たまはんことはあるまじきことなり。』(②巻4・三四三)という「天照神」の斎宮に対する託宣によって、皇統譜への参入が保証されたのである。とすれば、狭衣の父堀河大臣がある「罪」によって即位できなかった負性は、その子狭衣の即位、孫に当たる若宮の即位の可能性によって解消されるのではなからうか。

五

では、狭衣は即位することに対して不本意だったのであろうか。狭衣の即位が決定した後、狭衣は齋院となつた源氏宮を訪問し、「もとよりはこの

世のことは、殊に好まずなりにし御心なれば、いかでかは(源氏宮ニ会エナクナルコトヲ)なために思されん」(②巻4・三四七)と語られた後に、「月の顔をのみ眺めさせたまへり」(同・三四八)と語られているのをどのように理解すべきなのだろうか。もちろん、「月の顔をのみ眺め」るのは物思いに耽っている記号であるわけだが、そこには天稚御子への思いが充満しているのであり、それは昇天できなかったことへの後悔を意味している。とすれば、狭衣は昇天できなかったかぐや姫であつて、いわば『竹取物語』の裏返しでもあつたのだ。昇天できなかったことに対する最終的な反対給付が、帝位という地上における最高位であつたわけだが、それに対して狭衣は、

① この世もあの世も、思ひし事どもは違ひ果てぬる代りには、かうながらも、さやうに乱りがはしう心を分くる方々だになうて、今二三年だに過しては、いみじからん絆どもをもふり捨てて、世を背きなんぞ、思しめしける。(②巻4・三六一―三六二)

② かうあるまじきさま(注―即位)にさへしなしたまへる神の御心は、思へばかたじけなく、ありがたく思ひ知られたまふを、一方しも見がたう(注―源氏宮に会えなくなつたということ)のみなりたまひにけるのみぞ、なほさらに恨めしうおぼえさせたまふ。(同・三七五)

③ そのかみに思ひしことは、皆違ひてこそはあめれ、とぞ思しめしける。(同)

④ 野山川のそこを御覧するにつけても、思し沈みにし方様のことは更に忘れたまはず。(同・三七七)

と狭衣の心中を通して語られていることは、狭衣が即位したために、源氏宮への恋の挫折(①②③④)と出家願望が成就しなかつたこと(⑤⑥)を嘆

いているということであり、それは、狭衣は帝位に関心を持っていないということだ。⁽¹⁴⁾

とすれば、なぜ臣下である狭衣が即位させられたのだろうか。狭衣即位によって、父親の堀川大臣は太上天皇に、母親は皇太后宮に任命されたという点からも、堀川大臣の即位の障害となった「罪」が無化されたわけだから、『狭衣物語』を〈孝養〉⁽¹⁵⁾の物語と読み取ることもできよう。

六

狭衣が即位してから一品宮は出家し、死去するわけだが、その後には飛鳥井姫君は一品宮となったのである。母親の飛鳥井女君は故平中納言の娘であるから、その子の飛鳥井姫君も決して身分が低いわけではないが、一品宮になることによって、皇女としての尊厳が付与され、「即位した狭衣の宮中に養母一品宮の名代として入ることにな」⁽¹⁶⁾り、狭衣の娘として重い存在になったわけだから、飛鳥井姫君のサクセスストーリーとして受け取ることができよう。

また、宰相妹君は死去した父親の式部卿宮が望んでいた東宮とは結婚せずに、母親や兄の宰相の後押しによって狭衣と結婚することになったけれども、狭衣の即位後、一品宮の出家、死去に伴い、妹君が入内して藤壺中宮となり、いわば后としての最高位に上りつめるのである。仮に妹君が東宮妃となつて、将来的には同様な地位に即位した可能性もあるが、その東宮よりも先に即位した狭衣帝の中宮になったわけだから、これも妹君のサクセスストーリーと見ることができると同時に、父の故式部卿宮の願望をもかなえたことにもなるのである。

このように娘の飛鳥井姫君と宰相妹君とが各々押しも押されぬ地位を獲得したのであって、それらは狭衣が即位したからこそ可能となったのである。とすれば、即位したことに對する狭衣の内心はともかくとして、表面的には狭衣の、裏面においては飛鳥井姫君と宰相妹君のサクセスストーリーが『狭衣物語』であったのだといえよう。そのような意味において明石一族の上昇が基層に据えられていようが、狭衣の即位は父堀川大臣の恨みを晴らすものであり、狭衣の真意はともかくとして、『狭衣物語』とは単に狭衣の個人的な特出性が語られているのではなく、狭衣本人の内面とは無関係に、堀川大臣家が皇権という組織に組み込まれて、上昇していく過程が語られているのではなからうか。とすれば、狭衣が即位したということとは堀川大臣家を上昇させていく原動力となったのだ。

注(1) 本文は新編日本古典文学全集本による。

(2) 本文は新編日本古典文学全集本による。

(3) 中田剛直『校本狭衣物語』巻一(桜楓社 昭五一・11)によれば、第一類本系統の平出本・内閣本・宮内庁三冊本・松井三冊本・押小路本・黒川本が「五の御子」となっている以外は「二の御子」となっている(為秀本と京大五冊本は「二の宮」とある)。ちなみに、近年の主要な注釈書を繙いてみると、岩波大系本と新編古典文学全集本が「五の御子」となっているが、朝日古典全書本・新潮古典集成本・『狭衣物語全注釈I』巻一(上)(おうふう 平一一・9)は「二の御子」としている。また、『狭衣物語諸本集成』第一巻―第六巻(笠間書院 一九九四・9―一九九八・9)には六種類の伝本が所収されているが、伝為明筆本(第一巻)・伝慈鎮筆本(第三巻)が「五の御子」となっている以外は、「二の御子」とある。

(4) 三谷栄一『狭衣物語』(『体系物語文学史』第三巻 有精堂 昭五八・7)

- (5) 千原美沙子「源氏宮論その一—源氏宮像の形成—」古典と現代 二十六号
一九六七・4)は、堀川大臣が権力を未長く維持していく方法として、源氏宮を、その宮が齋院になった後は、女一宮を後見していると指摘する。
- (6) 深澤徹「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造—陰画としての『無名草子』論—(上)」(文芸と批評 第五卷第三号 昭五四・12)。他に『竹取物語』との関係を論じたものに、鈴木泰恵「『狭衣物語』と『法華経』—へかぐや姫」と〈月の都〉をめぐる—」(解釈と鑑賞 平八・12)、同「狭衣物語と〈へかぐや姫〉—貴種流離譚の切断と終焉をめぐる—」(武蔵野女子大学紀要 三十二号 一九九七・3)などがある。
- (7) 両者の血縁関係を想定する説もある。広瀬唯二「『源氏物語』における人物の相似と系図」(『武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集』和泉書院 一九九九・11)
- (8) 注(2)前掲書頭注
- (9) 鈴木泰恵は「常軌を逸した、反秩序のにおい」(『狭衣物語と〈声〉—王権への視線をめぐる—』日本文学 一九九四・5)であると指摘している。
- (10) 東宮は以前から飛鳥井姫君の成長を待って入内させようという気持ちは変わらずにいるが、姫君が裳着を済ましたにもかかわらず、姫君側から音沙汰がないので、狭衣帝を恨んでいると語られている点からも、東宮は成人の領域に達していると考えられる(『巻4・三九一』)。
- (11) 井上真弓は「天照神」を導入することによって、「王位継承を乱すかみえた狭衣即位による新しい秩序が正統化されている」(『狭衣物語』の「天照神」表現を読む『物語研究』新時代社 一九八六・4。後に『狭衣物語の語りと引用』に所収 笠間書院 二〇〇五・3)と指摘している。
- (12) 三谷栄一「狭衣物語の構想と構成」(国学院雑誌 昭四三・6)
- (13) 平井仁子「『狭衣物語』試論」(物語研究 第二号 昭五五・5)、阿部好臣

「狭衣物語主題攷—月と心深しの構図—」(国文学研究資料館紀要 第十一号 一九八五・3)

(14) 鈴木泰恵は注(9)前掲論文において、狭衣自身は帝位に対して価値を見出していないと指摘している。

(15) 井上真弓は「この物語は男主人公狭衣の物語として定位しているにも拘らず、父堀川殿の物語もその裏で同時進行して、物語の始発に提示された父の『罪』を子と贖罪するという、表裏の関係にある」(『狭衣物語』の構造私論—親子の物語より—)日本文学 一九八二・10。後に『狭衣物語の語りと引用』に所収)と指摘する。

(16) 田村良平「『狭衣物語』における飛鳥井母子の位相」(中古文学論攷 第八号 昭六二・12)

引用文の表記の一部を私に改めた箇所がある。なお、算用数字は巻、漢数字は該当頁数を示す。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)